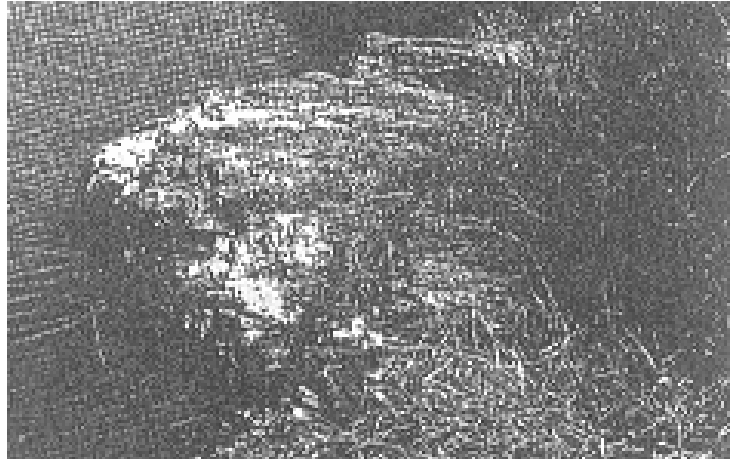


(4) 川と生活

かつての久慈川沿いでは、漁業の他さまざまな地場産業が栄え、そのうちのいくつかは今も脈々と生き続けている。川とかかわりの深い地場の産業と地域に残る伝統漁業について以下に記す。

1) 西ノ内紙

かつて久慈、那珂地方で生産される和紙は西ノ内紙と呼ばれ、美濃紙、越前奉書とならんで日本三大和紙の一つに数えられた。常陸大宮市(旧山方町)西野内には久慈・那珂両郡の各地で生産された和紙を一手に扱う問屋があり、久慈川の舟運を利用して水戸や江戸に出荷された。原料には楮^{こうぞ}だけを用い、虫がつかず、丈夫だったので、商家の大福帳に重用された。常陸大宮市(旧山方町)舟生^{ふにゅう}の久慈川べりには、あたりの農家の人たちが「川さらし」に用いた「紙漉き岩」^{かみす}が残る。舟生には紙漉きの伝統を伝えようと、「かみの里和紙資料館」がある。1971年県指定無形文化財、1977年国選択無形文化財に指定された。



舟生の「紙漉き岩」(常陸大宮市, (旧山方町))

2) 額田の建具

那珂市(旧那珂町)額田は中世の城郭跡も残る歴史のある土地として知られるが、現在は木工業者の多い地区としても有名である。ことの起りは明治初期、額田の久慈川べりの舟戸^{ふなと}の河岸が、大子や上小川方面から筏に組んで運ばれた木材の陸揚げ場として繁昌したため、ここに製材所ができ、大量の廃材が出たため、それを利用する建具業が起ったのである。そして大正12年の関東大震災を契機に飛躍的に発展し、最盛期には40~50軒の建具業者が軒を連ねたという。しかし、水郡線の水戸~下小川間の開通、辰ノ口堰の改修工事による筏輸送の困難等により、昭和初期には筏による木材輸送は廃止された。そしてたびたびの水害、木製品加工業の不振により、上流から来ていた建具業者は帰り、舟戸の業者も現在の高台にある古宿の地に引き上げてしまった。



額田の製材所(那珂市)

3) 伝統漁業

久慈川流域にはアユ、サケ、コイ、フナ、アイソ（ウグイ）などさまざまな魚を対象に多くの伝統漁法が残されている。

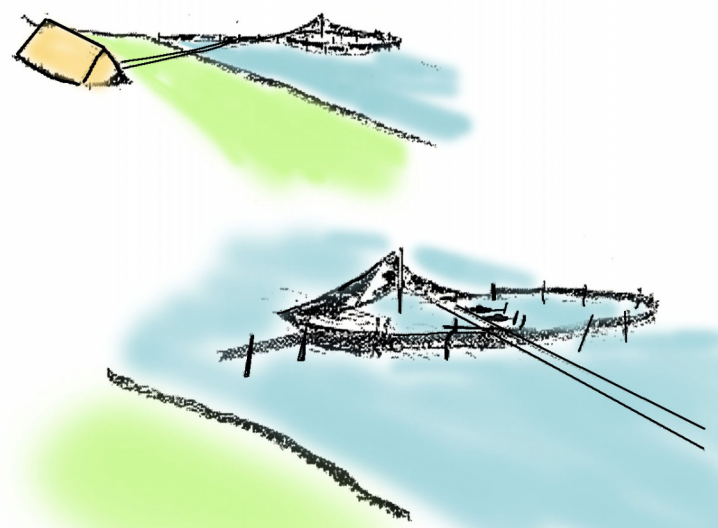
アユの鵜縄漁

久慈川流域でかつておこなわれた伝統漁法のひとつで、鵜や鴉の黒い羽をむすびつけた長い縄を舟から下ろし、半円を描くようにして岸边へ寄せる。驚いたアユは縄の内側へ追い込まれるので、そこに投網を打って捕獲する。縄には扁平な石を20個ほど結びつけて、錘として用いた。



サケの罟漁

常陸大宮市（旧山方町）の岩崎堰より下流でおこなわれる漁。川下に開口するように半円形をなして杭を打ち、網を張る。この網の中に罟のサケを入れておく。産卵のためにサケが罟に寄ってくると、川底に仕掛けた脈糸に触れ、河原の小屋に結びつけた鈴が鳴る。そのとき開口部に吊ってあった袋状の網を落として捕獲する。



サケ^{たてあみ}建網漁

毎年10月26日から12月25日まで、久慈大橋の上流側でおこなわれる。川を横切って杭を打ち込み、^{あば}浮子を付けた網を設置する。遡上するサケがかかるのを^{とや}小屋で待ち、浮子の当たりをみて、舟を漕ぎ出して捕獲する。

現在、ここで捕獲したサケは、常陸大宮市(旧大宮町)富岡のサケ孵化場で人工孵化させ、春先に富岡橋付近で放流されている。



サケ建網漁の様子(東海村)

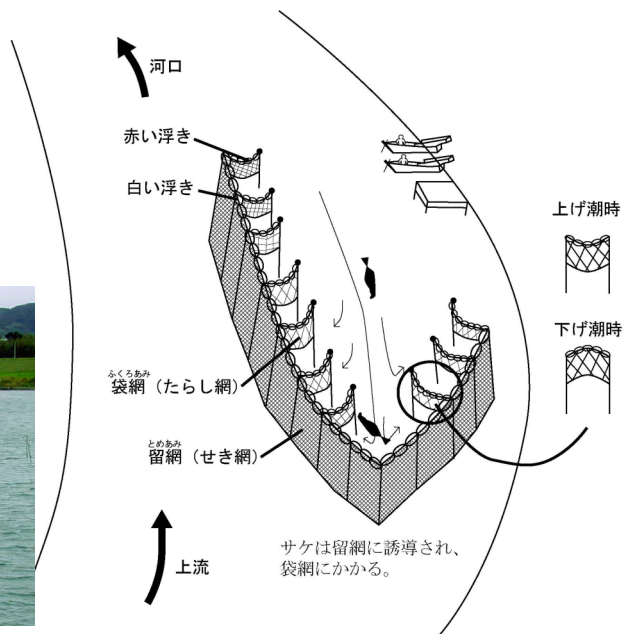


図 2-8 サケ建網漁

アイソの石室漁

アイソ(ウグイ)の産卵期の5月ごろにおもに中流域でおこなわれ、「瀬付け」ともいう。早瀬のへりにアイソの産卵床を人工的に作り、そこに集まった魚を投網で捕獲する。産卵床の作り方は、木の杭を打ち、そのすぐ下流部に砂利を盛って一定面積の瀬をつくる方法や、大きな石をかき集め、高さ1mほどの小山を作ってその下流部に小石を敷く方法など、いろいろな方法がある。

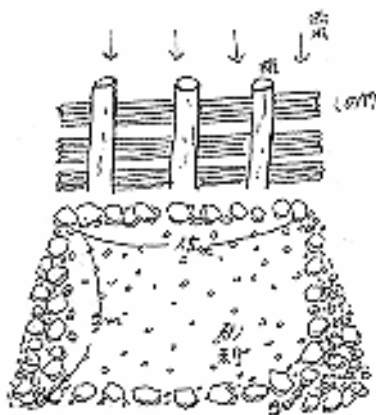


図 2-9 アイソ漁の瀬の作り方2種